会員のひろば

明治天皇御製

苫小牧市医師会　牧田　茂雄

昭和8年4月、札幌一中に入学して最初の強い印象は、毎日の朝礼で当時の校長山田幸太郎先生に明治天皇の御製を奉唱させられたことである。毎月色変りの紙に1月分の御製を印刷してあるのが渡されてある。校長が最初の5字を読むと続けて全校生徒が31文字を斉唱し、校長がその意味内容を説明するのである。

たまたま小学生の頃、家の座敷にあった屏風の淡彩の日本画に短歌がそえてあった。「よもの海みなはらから（同胞）とおもふ世になどなみかぜのたちさわぐらん」絵は上に白帆の舟が一艘下に松林のある白砂海岸が描かれてあった。これは明治37年日露戦争の時の御製である。もう一つ「あほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり」絵は上には高い山の峰、下には細い道と菅笠をかぶり旅姿の旅人の後姿があったのを覚えているが、あとの4枚は記憶にない。戦前の岩波文庫に「明治天皇御製」があったのを思い出し上京した際神田の古本屋で探したら運良く見つかった。奥附に昭和13年4月15日第1刷発行昭和20年9月30日第7刷発行とあった。題名が「明治天皇御集」となっている。ページ数は256頁、明治11年から45年まで総数1687首が載せてある。読んでみると短歌としては昔の歌人のような名作とは言えないが、平明で穏やかでやさしく心のこもった思いやりのある歌ばかりであって、写真で見るような黒髭のこわい顔からは想像もつかない立派な人柄で、諸外国のような好戦的な君主ではなかった。当時の閣僚からも心服され国民すべてから慕われていた事が理解される。その幾つかを次に記す。

◇

人もわれも道もまもりてかはらずばこの敷島の国はうごかじ

いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのがをさむる國はいかにと

わがそのの梅の花見むこの春もこぞにかはらぬ人をつどへて

池のおもは月にゆづりて蘆の葉のしげみがくれを行く蛍かな

あまたたびしぐれて染めしもみじ葉をただひと風のちらしけるかな

棚ゆひてほかにうつさむ藤の花かかれる松はいたく老いたり

たかどのの内もあつさにたへぬ日にしづがふせやを思ひこそやれ

老の坂こえぬる子をもをさなしと思ふやおやのこころなるらむ

明治天皇御集

いたでおふ人のみとりに心せよにはかに風のさむくなりぬる
こらはみな軍のにはにいではてて翁やひとり山田もるらむ
なかなかにみやびすくなしあまりにも作りすぎたる庭のけしきは
いかならむ薬あたへて國のためいたでおひたる人をすくはむ
まつりごとただしき國といはれなむもものつかさよちから盡して
きずなきはすくなかりけり世の中にもてはやさるる玉といえども
かざらむと思はざりせばなかなかにうるはしからむ人のこころは
國のためあだなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ
年へなば國のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり
たたかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして

◇

山田校長は明治天皇を心から尊敬していた。昭和51年に六華同窓会発行の山田幸太郎先生顕彰記念誌「永魂」には先生の遺稿と教職員と卒業生の思い出がある。御遺稿には「明治天皇御一年祭に際して」の御講演で天皇の高徳を詳しく述べられ、乃木将軍が日露戦争が終って天皇に拝謁した折、旅順港攻撃に失敗して多くの将兵を戦死させた事を報告してその責任をとることを申し上げると、天皇は「朕が在世の間は死すことを許さず」とおおせられた事が記してある。教員の宮田先生は生徒の中には非行にはしる子もいて職員会議にかかることがあるが、平素は厳しくしつける校長が退学だけは一度も認めなかったという。

年賦によれば校長は明治4年生まれ、明治27年札幌農学校卒業、四国九州の中学校の教諭校長を歴任して明治41年10月北海道庁立札幌中学校（当時は北10条にあった）校長に着任、昭和12年3月退官まで30年の長きにわたって歴任したのは異例のことである。先生はまた博学で漢籍に詳しく、書も達筆で「永魂」の巻頭の色紙の短歌の字は見事である。先輩の卒業生の思い出によれば英語の教師の休講のとき校長が代講に来られその流暢な英語に驚いたという。これは大正11年6月から1年間欧米視察旅行に行かれた成果であったと思う。また当時としては珍しく生徒に自治をゆるし、学友会の幹事長は全校生徒の選挙で選ばれた。これも諸外国の自由主義を見聞したためであろう。

最後に私は山田校長と同じく個人としての明治天皇を尊敬するのであって、天皇制そのものに賛同しているのではない。むしろ天皇制には反対である。しかし昭和20年の敗戦の時は天皇制を残すことは止むを得なかった。もしあの時天皇制を廃止したらもっと国内が混乱したと思う。また私は校長の退官した昭和12年4月に北大予科に入学したので、明治天皇御製を奉唱した最後の学年になったのである。後輩の学生諸君は御製を奉唱しただろうか。

◇

明治天皇の事をもう少し知ろうと思って札幌の三省堂に行って尋ねたらパソコンからプリントしてくれた。在庫と廃刊をふくめて40数冊もあったのでそれを苫小牧の市立図書館で調べた。その中で一番詳しいのはアメリカ人の文学者ドナルド・キーンが書いて角地幸男訳の「明治天皇」で、上下巻合わせて千頁を越す大冊である。彼は天皇の一生を御誕生から崩御まで膨大な内外の文献を引用して記述している。特に憲法発布とか教育勅語などの公式行事には宮内庁発行の「明治天皇紀」が多く使われている。諸外国の外交官も天皇の誠実なことを同時代のイギリスのビクトリア女王と並べて東西の名君と讃えている。明治時代は戊辰戦争から始まって西南戦争、日清戦争、日露戦争とほとんど10年おきに戦争が続いた大変な時代であった。毎日激務の連続であった天皇の唯一の楽しみは酒であった。しかし天皇には糖尿病という持病があり合併症に腎機能不全、不整脈、下肢の動脈閉塞による疼痛があり晩年には歩行困難であった。しかも天皇は生来の医者嫌いで、侍医がいくら勧めても診察をうけることを拒否したという。天皇は明治45年（1912年）7月30日午前0時43分、尿毒症で崩御された。

初　夏

胆振西部医師会
北湯沢温泉病院　御園生　潤

昭和48年、日本は『石油ショック』で揺れ、日本を文明国家たらしめた高度経済成長に終止符が打たれた。当時私は中学２年生。社会が激震を迎える中で、この年ニッポン放送が主催する『第３回全国フォーク音楽祭』が開催された。グランプリは後に東芝EMIからデビューするポニーテール、作曲賞は北海道から参加したデュオが受賞した。ふきのとうだった。ソングライター・山木康世氏、シンガー・細坪基佳氏はそれぞれ22歳、20歳のときであった。アマチュア時代に作られた美しい曲の数々が世に発表されたのは１年後の昭和49年７月。アリス、井上陽水、リリィ、五輪真弓などに比べて約２年遅れの旅立ちとなった。叙情性あふれる詞と感受性ゆたかなメロディーのアンサンブルが凝縮されたデビュー・アルバム『ふきのとう』から１年。より素朴な日本の原風景を透明感のあるハーモニーで表現した２ndアルバム『ふたり乗りの電車』がリリースされた。２人の成長ぶりがうかがえ、流行がどうあろうと、『ぼくたちは運命共同体なのだ』という強い信念がアルバム・タイトルに表現されている。昭和50年６月、日本は、高度経済成長のツケ『公害』に頭を抱えこんでいた頃であった。

ふきのとうは『白い冬』、『南風の頃』など数々の名曲を世に送り出し、それらは今日でも愛され続けている。民放のリクエスト番組でも時々登場している。そうした多くの曲の中で、初夏の札幌の情景を見事に表現したのが、このセカンド・アルバムに収録されている『初夏』である。歌詞には、大通公園の噴水やトウヒギ売り、時計台、カニ族、狸小路、そして完成まだ間もなかった市営地下鉄と地下街などが登場する。決して明るいタッチの曲ではないが、札幌生まれ、札幌育ちの私にとっては大好きな１曲である。

◇

今年も札幌に初夏の季節が訪れる。例年の通りで学会シーズンたけなわとなる。あれから30年。札幌の街も大きく変貌し、ふきのとうのメンバーの二人も、それぞれが精力的な活動・活躍を続けているが、札幌の初夏、初夏の札幌を愛する人々は依然として多いと思う。「札幌の四季の中で今頃が一番僕は好きです」。大学に入学直後、まだ若い、教養部のドイツ語担当の教官が、さわやかな風の吹きぬける好天の初夏の日に、当時道外出身勢が約半数を占めていたわれわれ学生に語ってくれたことが今でも忘れられない。初夏の札幌は現在の私にとっても待ち遠しい季節である。

「救荒医」建部由正

小樽市医師会
札幌宮の沢病院　本間　勉

１．江戸の四大飢饉

元禄・宝歴・天明・天保の４世代は冷害・干魃・洪水等の天変地異に見舞れ（30～50年周期）、農作物の凶作特に年貢米が平年の３割に減収して農民のみならず一般大衆も餓死寸前に追い込まれた。特に宝歴５年（1755年）は大飢饉で悲劇的世相を呈して、農民一揆は頻発し餓死者続出した。

建部由正（よしまさ）（三代目清庵→一関藩医）はこの時代の民衆の様相を次の様に記録している。

「鵠形鳥面（骨と皮に痩せた鳥の様な顔）の老若男女が米屋の玄関に蟻の如く群（むらが）っている」と。

２．藩医“清庵由正”の活躍

①“備荒倉”開放…一関藩（田村家）の食糧倉庫で穀物と薬草を貯蔵（３カ所）していた。彼は藩主・重役に強請して全面開放し藩民・農家に無料で分配した。

②“救荒二書”献上…野草の食用活用法を記録し、図解して味・調理法・解毒法まで解説して

いる。

③由正が藩に献上した救荒二書の重要性に着目した江戸の申椒堂須原屋市兵衛が多数印刷出版した（3年後にはこの人が「解体新書」をも出版している）。

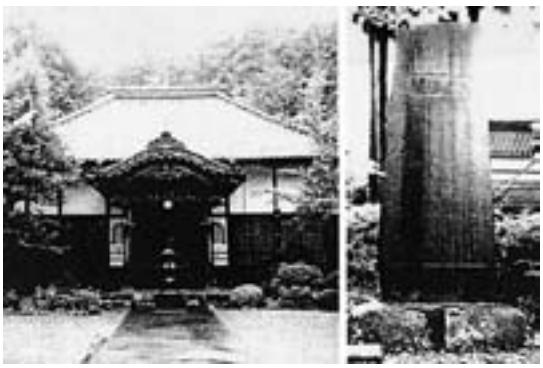
④以上の活躍により建部由正の名声はいやが上にも高まり尊敬の的になった。しかも彼の業跡を実証するように一関藩史には農民一揆も餓死者の記録も無いという。

3.「救荒医」とは…

定義は無いので私なりの考えを述べます。

①天災により荒廃した田畑（でんぱた）修復に奔走する医師。

救荒一書	→	「民間備荒録」(上下2巻)(明和5年) 中国（荒政要覧） 宮崎安貞（農業全書）　参照 貝原益軒（大和本草） 建部清庵著「民間備荒録」明和8年初版 （一関市博物館、一関市厳美町）
救荒二書	→	「備荒樹芸の法」(上巻) “四木一草（なつめ・栗・桑・柿・油菜）が飢饉対策（食料）に役立つ。
	→	「備荒儲蓄の法」(下巻) 野草の食用化(味･調理･解毒の解説)と栽培法。
	→	「備荒草木図」(天保4年) 挿絵と解説のある薬草図鑑として有名。大槻玄沢・杉田伯玄が絵を受持った貴重なものである。



田村家菩提寺。祥雲寺本堂（左。一関市台町）と建部清庵顕彰碑（昭和15年西磐井郡医師会建立）。祥雲寺には建部清庵一族の墓がある。

②天災による凶作飢饉から民衆を救うべく食料獲得に奔走する医師。

③食料難を救うべく野草の食料活性化に奔走する医師。

④食料飢饉による餓死・栄養失調・伝染病等の予防に加療・薬草獲得に奔走する医師。

⑤これらの活動を可能にし、有効化させるためには市井の一医師では不可能であり、藩医で実力者でなければならない。清庵由正は藩主に信頼があるばかりでなく藩民の間では名医として人徳者として名声の高い人物であった。

故にこの頃一般大衆から「救荒医」と言われたのではないだろうか。

彼の活躍がいかに功を奏したかを物語るように一関藩史にはこの年代の餓死者も農民一揆も全く記録がないという。この史実から墓碑や銅像が建立されている。

4. 建部由正の生誕地

1712年・正徳2年7月に一関城下川小路（一関市田村町）で生れた。

建部清庵像
（昭和58年喜多敏勝作。一関市文化ホール前）

一関藩医（外科）建部元水の次男であるが長男夭逝のため長男となり後に外科医・内科医（藩医）となる。

田村町に由正生家跡があり、近くのビル壁にプレートもある。同町の菩提寺（祥雲寺）境内の墓碑には孫の4代清庵由水（良策）の撰による文章あり。

“幼にして敏、長じて孝友、読書倦(う)む無し”と。

三代清庵由正の活躍と人柄が代々語り継がれて昭和58年に一関市文化ホール前に彼の銅像が建ち、昭和60年にはこの町出身の大沢敏弘夫妻中心の市民で造成した「清庵野草園」が田村城趾・釣山公園内に出来上った。救荒二書に記録されている食用・薬用植物136種の中、一関地方に自生する100種が陳列されている。

5．建部氏の家系

左衛門尉→豊臣秀吉家臣→伊達政宗家臣
（鍼灸医）
↓
清元由篤→大名堀直矩家臣→初代清庵
（鍼灸医→傷科医）
↓
元水→一関田村三代藩主誠顕家臣（藩医）
（傷科医→外科医）　→2代清庵
↓
由正→一関田村四代藩主村顕家臣（藩医）
（内科・外科医）　→3代清庵
↓御奉薬
参勤交代・御近習並
御取次格
江戸遊学
由水→一関田村四代藩主の藩医
（良策）　→4代清庵
（内科・外科医）
↓　不詳

6．建部由正と杉田玄白の関係

「和蘭(オランダ)医事問答」→明和7年6月“質問書4ケ条”

清庵由正がオランダ医学に対する多年の疑問を4ケ条にまとめた20枚の書簡（1回目）を江戸に遊学する衣関甫軒(きぬどめほけん)に託して玄白に解答を求めた。

（質問4ケ条）

・1条…オランダから来る多数の医者は皆外科系であるが内科系やその他の医者はいないのか。
・2条…日本のオランダ流医者は膏薬・油薬ばかり使用しているが内科・小児科・婦人科等に用いる薬は無いのか。
・3条…日本では長崎に1年足らず行って蘭学の勉強をすれば“槍持ちの八蔵”も“挟箱の六助”も和蘭流外科医となって八安先生、六斉先生となるのはおかしい。
・4条…オランダ本草書（薬草全集）を見たことないがあるのだろうか。

3年後にやっと玄白に届いた。これを見た玄白は、“遠隔の地にも同志が居た”と感激して丁重な返信を送ったという。

予期しなかった返答に狂喜し納得した由正は“2回目の質問状”を玄白に送った。

薬名がまちまちで一様でなく、日本名もオランダ名も区別がつかずミソもクソも同じである（安永4年4月2回目の質問状主旨）。

玄白は的確な解答と共に「解体約図」（解剖略図）を送り後に「解体新書」も送っている。清庵由正は大医人杉田玄白先生の誠実な人格に惚れ込んで多くの息子全員を玄白門下に弟子入りさせ、玄白の熱心な要請に従って20才の5男を玄白の養子にして伯玄と名のらせた。

7．「腑分け」

天明5年（由正死後3年目）に4男・由水（良策）四代目清庵が大槻玄沢・衣関甫軒等16人と共に田原刑場で斬首された囚人豊吉の腑分け（死体解剖）を行っている。

（“腑分け”は山脇東洋が31年前に、杉田玄白が14年前に実施している）

宮川先生のこころ

札幌市医師会
田島クリニック　渡部　公二

三年の喪が明け、醫王院殿どの（俗名）宮川清彦氏のお墓にお参り申し上げました。

質素なたたずまいの中に、気品に満ちた魂が見える。すがすがしさに思わず息を呑み、襟を正した。

生前の先生は、あはれ小生にとっては神の如き存在であった。百尺竿頭更に一歩を進め、咄々々。決して派手な伊達姿なんぞ、ついに見受けられなかった。

仁者は山を愛し、智者は海を好む、と謂われている。先生は格別な思いを込めて、山をこよなく愛された人であった。極められた山々は数知れず、小生も時々お供をさせていただいた。が、終始、ご自分のペースを貫かれておられた。あのお姿が今も脳裏に焼き付いて、ひとときも忘れたことはない。

北海道の山並を征服された先生は、矢も盾もたまらず、日本のアルプスへと果敢な挑戦をなされた。そう、涸沢岳を皮切りに、白馬に劔に槍・穂高…天狗の如く踏破され、浅間や軽井沢も丁寧に看破された。そして、日本一の富士山なんぞは屁の河童。ご夫婦での隠密登山だったそうな。

さて、日本が全部見えた所で、スイスはモン・ブランの氷壁へのチャレンジャーとなってしまった。その時、小生の一先輩も登頂に成功された。ここに面白いエピソードをご紹介しよう。札幌北楡病院の米川元樹院長のことだ。強の者たる先輩は、クツは宮川先生の靴、そしてストックは宮川夫人のものであったそうな。それ見た事か。知らぬは主人公ばかりなりのありさまのようでした。うそかまことかは、神さまのものさし。

人間のその時の出会い、生々流転、一期一会の大切さを思わせる出来事ではありました。ちなみに、その靴とストックは、それぞれのアイゼンやハーケンと共に宮川家の生きた印。家宝として祭られていて、未だ見ぬ夢を見ている。

一方、小生のような者に殊の外、お目をかけて下さった。ススキノの料亭はおろか、通の店までご紹介して下さる温かいお心遣いに衷心より感謝々々。しみじみとした、ほの温かいぬくもりにいつまでもこの身をゆだねていたい。

ここに、啐啄の機を逸せず、先生の辿られた心境をしかと受け継ぐのは小生の義務だと思う。現在､｢禅林句集｣に没頭し、空海大師と道元禅師及び仙崖和尚のこころをまさぐる、とんでもない奴と化している。先生こそ、仏性遠からず、今は“はちす”の上に遊び、出でては「桃季ものいわざれども、己ずから蹊」をなされている。無碍か自在か夢に蝶。

きっと、今頃親鸞・蓮如上人と隻手の音声を交わしているころ。目に浮かべつつ「そのお声を聞かせて下さい」と、お祈り申し上げた。思わず感極まりて、涙こぼるる心地ぞする。ご夫人の機転によって、そっと一人にして下さった思いやりの有難さよ。誠にありがとうございました。ひしひしと、胸にせまる思いはつのる。

欄間に居並ぶ宮川家代々の写真が目に飛び込む。先祖はやはり「おさむらい」であったのだ。合点。きっちり見届けて得意顔。私用、思い出の写真帳の中は、登山に関するものが、一面を覆い尽くす。小生もご一緒させていただいた折りから、一葉一葉の写真の場所、場面までちゃんと覚えておりました。ご夫人と一緒に、これは何処そこ、あれは何時と、楽しい一時を過ごさせていただいた。

動と静。別室にはきらめく本の山が、うず高く積まれています。が、どうやら小生の趣味も、まんざらではなさそうな。たった一つの違いといえば、それが新刊本か古書狂かだけのことと見つけたり。ふと、机の上に目を遣ると、今や物狂いの本､｢禅林句集｣など目に付く。仏教思想というものは、根本なんぞに変わりはない。何宗であろうと、忘れかけたる仏性は、人人にとりても遠からず、己が心の内に在る。遠くに求めるクセをすぐに治すこと。

人生の教師と仰がれる、孔子も孟子も子思子もその著「中庸」の中で、くり返しくり返し述べ

る。「仏性遠からず、道は近きにあり」と。空海大師に云はせれば、「真如外に非ず。身を棄てて何くんか求めん」(般若心経秘鍵)

果たせるかな。文章・あいさつ・和光同塵とやら。当初、口うるさい先生、としか写らぬ昔が今や恥ずかしい。どこか違うような笑えないような。

川端康成は小説「伊豆の踊り子」に云はせる。「いい人はいいね」このセリフが命の元となる。今ごろになって、馬齢を重ね、一つ一つの意味を味わい深くかみしめる。つくづく、そんな世代になったことを肝に銘じて。

さて、時は移り現在の師匠こと、田島クリニックの田島邦好名誉院長の話。さすがに、一寸個性の違いはあれど、一外の「さむらい連」には頭が上がらぬ。個々の分野に「道」と称す偉大な先達、居並ぶつわもの石塚玲器先生や先の田島先生、さらに札幌医科大学の鬼原彰教授の内に取り囲まれて、二進も三進もいかぬ幸せ者めが。

小生、本物の医師と成るべく、厳しいお叱りを受け、これは修業と心得る。例の憎っくき慢性膵炎も、自己管理を行き届かせていただいた。お陰さまにて、なりをひそめております。半端な言動は禁物。日々新たに感動を覚える毎日を過ごさせていただいております。職場は人生道場と化し、僭越ながら田島先生へと送らせて頂いた「春水四澤に満つ」という言葉。味わい深く、美しい余韻を残し、しっとりと、かつあっぱれな語感を鳴らせて響く。

当院も創業30周年目を迎え、またもやその節目に居合わせる小生にバトンをいただいたものの、事の重大さと責任の一大事に、なんと今更気が付く。ゆめ思はぬ、鈍い頭ではある。カケ出しの、ヒヨコのヨチヨチ歩き、はた、尻尾を巻いた犬の遠吠えと、軽く聞き流して欲しいものです。必ずや、仰いで天に恥じぬ人となりたいと、死に物狂いの努力を致しましょう。

諸氏も、一期一会の大切さ、不思議なご縁の結び付き、二つを心に沁み込ませることもあろうかと思います。その時の出会いを大切にせねばと、思い知らされるその日まで、咄々々と研鑽怠らぬようお願い奉ります。それから先は先のこと。ロングスパンで考えられる人生行路へ、出発進行。

初心忘るべからず、秘すれば花の人生、さぞや幸せなことかな。一以って之を貫き通す心ぞ希也。たった一つの骨かも知られぬ、隠れることを術（すべ）として、平々凡々たるただの隠居。陰徳を積み、秘する花を知り、人を相手にせず天を相手として、咄々々。仕事に励む姿。我事に於いて後悔もせず、冴え返る月をながめて写経三昧の日々ーそれは夢。叱ってくれた恩義を忘れずお墓参り、師匠の恩に報ゆることは、師匠を踏んで越えることと知るべし。色即是空の境地に遊ぶ人は、内に誠ありて外に現われる。一人一人の玉（ぎょく）を磨けば、仏性は現実のものとなろうか。位も名も金も命も要らぬ人は始末に困るものなり。

観自在。それは宮川先生のこころに通ずる、本来無一物。そして、やがて、これ色即是空への一本道となる。人生には三つの坂が横たわる。上り坂、下り坂、そして「まさか」。この橋々を、重い荷物をかついで日々精進に明け暮れる。仏様になられた醫王院殿どの。どうか、小生なんぞが色即是空なぞと声高々に叫んでいても、「平静の心」で見守っていて下さい。伏してお願い奉る。

万法一如。

「水分（みくま）りの　流れは千々に　わかつとも
いずれの夕べの　潮にまぎるる。」

先生のお墓は江別市に在る。

合掌。

竹中垢雪識

この短いエッセイを宮川恵子殿に捧ぐ。

（注：漢字・仮名遣いは原文のまま。）